

# わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70

湯島：1971－93

和光：1994－

38期(1984/昭和59年)

## 思い出だけ思い出じゃない、 実務修習



会員 江川 清 (38期)

実務修習地は宇都宮である。餃子が好きだからではなく、弟がそこに住んでいたからである。実務修習1年4ヶ月は、順に、検察、弁護、民事裁判、刑事裁判の各4ヶ月で、修習生は、皆、ウマが合い、時空を共有できた愉快的な仲間、8名である（因みに、38期の修習生は約450名）。

検察修習は、死体解剖の立会、新聞社・酒造工場の社会見学等いろいろあるも、就中、貴重な体験は、宇都宮競輪場の見学である。審判室でのスリット写真による着順判定には目が釘づけになる。審判室で、私は、ある職員から、「昔、この写真判定をめぐり、静岡自転車振興会が刑事告訴された事件があったが、告訴人が誰であるか」と訊かれるも、答えられなかった。後日、坂口安吾であることを知るや、競輪と彼の手柄・作品等に傾倒することになる。

競輪は、ラインの読みがレース展開の要で、ラインの読みは、選手の間関係のあり方（番手は先頭の選手を防御するべく後方の選手をブロックし、三番手はインを締めることに徹し自らは突き抜けぬことなどの不文律）を知ることには尽きるらしい。着順予想（問題解決）は、人間関係のあり方や人間の心理を知るに如くはない、らしい。社会における人間関係の「映し鏡」といえる競輪のレース見学企画にガッテン、である。単なる物見遊山ではないのである。

修習2年目の夏公開の「男はつらいよ」シリーズ第35作目の中で、寅さんが司法試験受験生の青年に説教垂れる場面がある。寅さんは、「リベラルアーツ」とかの小難しい横文字は使わずに、分かり易い言葉で、法曹を志す者には、須く、「豊かな教養と伸びやかな

精神が必要である」と。

事新しく、私は、その科白に触発された。「そうだ、馬、見に行こう！」。リベラルアーツの都合よい拡大解釈である。行き先は、「宇都宮動物園」、ではなく、馬のみの動物園である。

駆け出し弁護士の頃、早期解決が求められている交渉事件を依頼されたことがある。複雑な事案でないのに、書面、電話等での交渉では埒が明かず、相手方会社に出向いての直接交渉となった。応接室に招かれるや、壁に掲げられた可愛い馬の写真に目が点となり、うっとりとその馬を見入ること暫し。なんと、G1レースの優勝馬ではないか。馬で話しは弾み、本題は後回しになった。しかし、事件は、70秒弱とはいかないものの、30分程度でのスピード解決。流石、スプリンターズステークス（中山芝1200m）を制した馬主である。ウマく行ったのは、偶然の輸贏なりや。

弁護士になってからも、負馬投票券を買い続け、香港・マカオの事務所旅行のメインスポットも、「沙田」（競馬場）で決まり。今でも、宇都宮家・地裁の事件の帰りも、山中の蝸牛之庵からの帰途にも、夜の泉町に立ち寄り、ママならぬママに納税義務を履行すること忘れちゃいない。私の実務修習は、「思い出だけ思い出じゃない」、のである。割愛の弁護修習、裁判修習も然りである。

二回試験で、書き込みの六法全書を持ち込むこともなく、無事、法の卵が雛に孵れたのは、司法研修所はもとより、宇都宮家・地裁、検察庁及び弁護士会の皆様が一丸となって、いい塩梅に卵の殻を啄んで下さったお蔭である。感謝。